

一を與へ易くして震度を再び増大するものではあるまいかと考へられる。例へばモホロポチックの
R.F.の發現時と前掲の地震記象の主要動の再振動時とはよく一致する様である。

或は又寺田博士の云はるゝ如くブロック各個の動搖よりの説明か或は純然たる二子地震として説明し
得らるものか、恐くは種々複雑なるものであらう。兎に角異常震域をなす地方の主の條件としては特種
の地質を形成してゐる所に起るやうに考へらるが尙一重に各位の御教を乞ふものである。

本調査に關しては更に詳細し再記載したいと思ふ、本文は本臺の諸先生に御教を願ひし事多く殊に國
富先生からは種々御親切の御教を賜りしを記して謝する次第であり尙、各測候所からは地震計記象をお
貸し與へられたる事を添記し感謝する次第である。

蒐 報

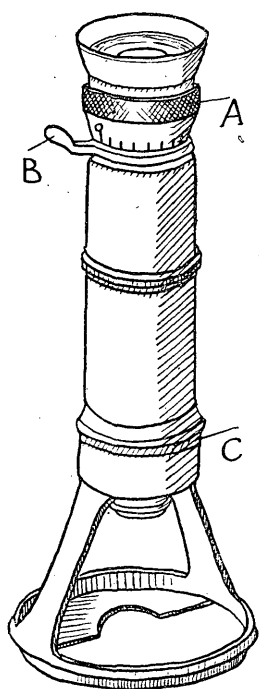
マリス、エ、ブラン測微鏡に就て

岡 田 武 松

マリス、エ、ブラン測微鏡(Micrometer)は巴里のマリス、エ、ブラン(Mallouet et Bin)會社の製作になつた

もので、元來は金屬その他の材料の硬度を試験する時に、補助器として用ゐる爲めに作つたものと云ふ話である、然るに是はまた地震計の記象紙を見る爲めに甚だ都合が宜ろしいと云ふので、漸々我々社會にも擴まつた譯である。

此器機の使用法は至つて手易い乃ち見やふとする記象紙の上に直立させて、底の半圓の中心を、見やふとする點にやる様にし圓弧を光の來ない方乃ち使用者の胸の方に向け、夫れからAを右手の拇指と人



指指で挿んで、極くヤワリくと廻はし、鏡中にある尺度の目盛が鮮明に見える様にする。

尺度の位置が曲つてゐる時はBを徐々に廻はして正だすことが出来る。

記象の長さを測らふとするには先づ鏡中の尺度で測り、その長さを倍數で割れば宜ろしい、此倍數を見るには、木函の一侧にある金屬の板片の一面の中央に十耗程目盛が正しくしてあるから、之を鏡檢して、實際の一耗の目盛中に鏡中の尺度の目盛が例へば丁度十五程入つたとすると、之は十五倍だと云ふ風に求めることが出来る。此鏡には十五倍のと十倍のと二た種類ある。

此鏡の底には割合に高い縁があるから、一寸見ると光が遮ぎられて、視野に來たる光が弱くなる様になり、暗くなる様に考へられるが、夫は全く誤解である、元來此鏡で視える範圍は至つて狭くて、底の半圓の中心から約二耗半以内であるから、底縁の影は少しも影響をしない、夫は無理に影響する様に光を送れば格別だが、普通に用ゐる場合は此心配は全くない、兎も角も底を小さな半圓に限つて見えなくしてあるのを見ても視野の狭いのは察せられる。

視野の明るくないのは、倍率が大きな爲めである、倍率の大きな顯微鏡は光の來る範圍が小さいので何れも明るくない敢て底縁の影の爲めに暗くなるのではない。

次に此鏡は記象紙の上へ「ガラス」を一枚置いて見る時は一寸不都合である様であるが、然し「ガラス」は此場合薄いものを用ゐるが當然であるから、Cの輪を一枚取り去つて、鏡の高さを加減するとドゥヤラ用ゐられると思ふ、勿論「ガラス」が厚くては駄目であるが、ソんなに厚い「ガラス」を用ゐる必要もなし又用ゐるのは面白くないのは云ふまでもない。

鏡の玉は指や何かでイジツてはいけない、塵が附いた時は布で拭ふと傷が付くから之は決してやつてはならない、新しい毛筆の極く柔かいので軽く拭つて落とす程度にする、又鏡は濕氣の少い乾いた場所に納めて置く必要がある、何にしても取扱は極く丁寧にする必要がある。

地震記象を見るには此マリス、エ、プラン測微鏡は便利であるが、視野の暗のが何よりの傷である、中

中央氣象臺では國富技師の考で照り返しの附いた電燈で記象紙を照らし此目鏡で見てる、その成績が誠に善ろしい、尤も晝間電氣が附かない土地では夜間この方法で調べるのも面白いと思ふ。

ヴ井ヘルト地震計据付及取扱方に就て (其ノ一)

國 富 信 一

佐 藤 秀 雄

地震計を据付くるには第一各地震計の配置具合を考ふる事が必要である。之れが爲めに照明の具合とか、戸障子等の開閉とか其れが開閉に依る通風とか、温度の影響の有無とか等を先づ吟味せねばならぬ。

之等の具合を綜合して適當に各地震計の配置位置を決定したる後、水平動を据付る位置に對して正南北或は正東西線を描かねばならない、此の正南北線は天體觀測か或は磁針の方向に其の土地の偏角の値を補正して測定するかであるが、磁針の方向より算出するよりは天體に依つて決定する方が遙かに精確である事は論を俟たない。而して天體觀測に依り正南北を決定するには北極星の觀測に依るのが最も適當と考へられる、此場合地震計に依つて測定せらるゝ、角度が一度迄の精確さを期し得ないものである